『君はこの映画を見たか！』
吉村 英夫　大月書店　778.2

『高校生諸君！
　映画を見なさい』
吉村 英夫　大月書店　778.0

『サルに教える映画の話』
井筒 和幸　バジリコ
N 778.0

『12 歳からの映画ガイド』
佐藤 忠男　小学館　778

『人生を豊かにするための 50 の言葉』
田中 雄二　近代映画社　N 778.0

『するめ映画館』
吉本 由美　文芸春秋
778.0

『2001 年映画の旅』
小林 信彦　文芸春秋
N 778.2

『古き良き時代の外国映画』
本吉 瑠璃夫　文芸社
N 778.2

『見ずには死ねない！
　名映画 300 選』
黒川 裕一　中経出版
N 778.2

二流の天使

この作品は、1946 年 (昭和 21 年) 製作の米国モノクロ映画であるが、昭和 21 年と言えば日本の敗戦翌年であり、当時は食べることもままならず、生きて行くのに一生懸命な日々を過ごしていた時期に、米国ではもうこのような素晴しい映画が作成されていたことに、まず驚かされた。

監督のフランク・キャプラは、作品として「スミス都へ行く」もそうであるが、厳しい現実から目を背け、非現実的でご都合主義的な、そして正直者が必ず報われるような世界観を描いた監督だと思う。それをアメリカの良心を体現してきたジェームス・スチュワートが、人柄の良さを見事に演じ、見終わって心温まる作品であった。

主人公の子供時代のエピソードから、生まれ育った小さな町から世界へ出て行き、建築家の夢を持つが父の急逝により「住宅ローン会社」を引き継ぐストーリー。世界的恐慌に見舞われ、新婚旅行出発寸前に、親身な債権者への対応でゼロとなるが、なんとか乗り切った。そして、銀行監査員の立会い日に、8000 ドルの現金を間違いから預金できず、破産直前に追い込まれる。その打開のために、死亡保険を目当てに自殺を決意するが、そこに「二流天使」が登場し、思いつかぬ人生を小気味良く展開されて行く。

私自身、あれが欲しい、これが欲しい、もっとこうなったら幸せなのに、と不平不満を言いますが、今より最悪な状況を経験したとき、例えば病気をして初めて健康の有難さが分かるように、「当たり前のことが幸せなんだ。自分のした事は良い事も悪い事も、やがて自分に帰って来る」と知らされ、ラストは予定調和ではあったが、感動的なハッピーな気分になった映画であった。S.N

天使のはね

昨年のクリスマス・イヴに始まった「タイガーマスク」の善意のプレゼント。4 月には大きなランドセルを背負った一年生のランドセル姿を思い浮かべました。そのランドセルニュースの中に、「天使のはね」の名前を見つけました。

『素晴らしき哉、人生！』には、翼 (はね) の無い二級天使が登場します。神様から、クリスマス・イヴに人生を悲観して自殺しようとしている男 (ジョージ・ベイリー) を救えとの命ぜられた二級天使は、200 年も翼の無い天使のままでは体裁が悪いから、上手くいったら翼 (はね) をくださいと神様に訴えた。

ジョージは幼い頃から、正義と善意を持って周囲の人々に接し、安い「住宅ローン」で住宅を提供していた。経営が破綻して死を目前にした時、二級天使はジョージに、「あなたの人生は、多くの人に対して有意義な影響を与え、無駄なものでは無い」と諭し、自殺を思い留めさせた。

そして、町中の人々がジョージの危機を知り、手に手にお金を届けるシーンに、タイガーマスクがランドセルを届けた善意と、ジョージへの善意が共通したものであることを改めて感じました。au

2011. 2. 3
vol. 9

『素晴らしき哉、人生！』

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

ネタばれ、注意 !!

この映画、あまり予備知識もなく DVD で初めて観たのですが、出だしのオープニング・クレジットがあまりに素朴すぎてアレレ！　でも、神様と 2 級天使の天上での会話あたりから徐々に引き込まれて、「これパラレル・ワールドじゃん !」と過去のテープを早送りで観るような小気味よいカットの連続に乗せられ、ごく自然に感動のラストシーンへ。

脇役が良かったですね。ヘンリー・トラヴァース扮する 2 級天使クラレンスが傑作！　羽の無いおじいちゃん天使が大好きになりました。バーグマン系美形のドナ・リードの良妻賢母ぶりも魅力的。ライオネル・バリモア扮する町一番の富豪であるポッターも憎まれ役なのだけれど、言い分は筋が通っていて、憎みきれないパーソナリティーで面白かった。主人公ベイリー vs ポッター = 民主党系 vs 共和党系 ?

やはりラストシーンがすごい (ネタばれごめんなさい)。笑顔とメリークリスマスの大洪水。「オールドラングザイン」の大合唱。山もりのプレゼントの中に、2 級天使クラレンスの愛読書「トム・ソーヤの冒険」が。中に『友のある者は敗残者ではない。翼をありがとう。クラレンス』の書き込み。そして、クラレンスが天使の羽をもらったことを暗示して、クリスマスツリーのベルがチリン！　このカラッとした大団円と怒濤のハッピーエンドに押し切られて、じわっと涙腺が。

ラストの「オールドラングザイン」は、音楽担当のティオムキンが最初に考えていた曲を無視して、キャプラ監督が強引に採用したのだそうです。以後、二度と二人の仲は復縁しなかったとか。ティオムキンは 6 年後、クーパー主演の『真昼の決闘』でアカデミー音楽賞をゲットして、映画音楽の巨匠に育っていきます。『真昼の決闘』主題歌の『ハイ・ヌーン』は、私が小遣いで買った最初の SP レコードでした。

主人公ベイリーとポッター氏は、住宅ローン業者です。2008 年に世界を震撼させたサブプライムローンのリーマンショックとダブりました。フランク・キャプラ監督が、キャプラ映画の集大成としてこの作品を作ったのは 1946 年。アカデミー賞では作品賞を含めた 5 部門にノミネートされたが無冠に終わり、興行的にも惨敗だったそうです。当時は第 2 次世界大戦終了直後で、アメリカが名実ともに世界最強国になった頃。きっとこの映画で元気をもらわなくても、アメリカという国も国民も十分元気だったからではないかと思います。

その後、毎年末に TV 放映される内に、それまでキャプラを知らなかった若い世代から再評価され、今ではクリスマスにこの映画が流れるのは定番となり、アメリカで最も親しまれる作品として定着しています。2006 年にアメリカ映画協会 (AFI) が選出した「感動の映画ベスト 100」の 1 位になったのは有名です。

日本で公開されたのは 1954 年ですが、日本でも当時はあまり話題にはならなかったと記憶します。ただ、最近の WEB でのユーザー・レビューをみると、TV や DVD でこの作品に触れた若い世代の評価は極めて高く、「癒し」に敏感な若者たちの置かれている状況が反映されているようです。K.M.

『フランク・キャプラ作品集』
778.2

『スミス都へ行く』
778.2

『オペラハット』
778.2

『素晴らしき哉、人生！』フィルムデータ

原　題：It's a Wonderful Life
製作年：1946 年
製作国：アメリカ
時　間：130 分

監督：フランク・キャプラ
脚本：フランセス・グッドリッチ他
原作：フィリップ・V・D・スターン
音楽：ディミトリ・ティオムキン
撮影：ジョセフ・ウォーカー他

出演：ジェームズ・スチュワート
ドナ・リード
ライオネル・バリモア
ヘンリー・トラヴァース

りぶらサポータープロジェクト　「シネマ・ド・りぶら」

『 素晴らしき哉、人生！』 関連図書案内 & DVD

【素晴らしきかな、ハリウッド！】

『明かりが消えて映画がはじまる』
ポーリン・ケイル　草思社
778.0

『アメリカ映画がわかる。』
朝日新聞社　N 778.2

『アメリカ映画主義
　もうひとつの U.S.A』
大場 正明　フィルムアート社　　N 778.2

『アメリカ映画 100 年帝国
　―なぜアメリカ映画が世界を席巻したのか？』
北島 明弘　近代映画社　I 778.2

『アメリカ映画風雲録』
芝山 幹郎　朝日新聞出版
N 778.2

『アメリカ文学と映画
　原作から映像へ』
曽根田 憲三　開文社出版　N 778.2

『アメリカ映画と占領政策』
谷川 建司　京都大学学術出版会
329.6

『アメリカ映画の大教科書 上・下』
井上 一馬　新潮社　778.2

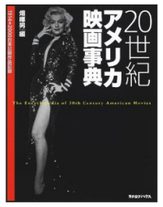
『映画　二極化する世界映画』
大久保 賢一　朝日出版社
N 778.2

『イメージの帝国 / 映画の終り』
吉本 光宏　以文社　N 778.2

『映画 365 本　DVD で世界を読む』
宮崎 哲弥　朝日新聞出版
I 778.2

『映画のなかのアメリカ』
藤原 帰一　朝日新聞社　778.2

『20 世紀　アメリカ映画事典』
畑 暉男　カタログハウス
778.2



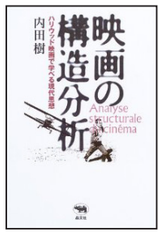
『映画の構造分析』
内田 樹　晶文社　　N 778.2

『映画でわかるアメリカ文化入門』
奥村 みさ　松柏社　N 778.2

『サンフランシスコで映画ばかり観ていた』
土井 ゆみ　パド・ウィメンズ・オフィス
N 778.0

『シネマ・ハント』
柳下 毅一郎
エスクァイアマガジンジャパン
N 778.2

『カリフォルニア・オデッセイ 2
　ハリウッド幻影工場』
海野 弘　グリーンアロー出版社
253.9



『汝の症候を楽しめ
　ハリウッド VS ラカン』
スラヴォイ・ジジェク
筑摩書房　146.1

『私の映画日記　別巻 1』
児玉 数夫　右文書院
N 778.2

『ハリウッド・メモワール』
バッド・シュルバーグ
新書館　778

『ハリウッド・スペシャル』
ボブ・ウィロビー
宝島社　W 778

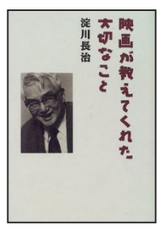
【素晴らしきかな、映画！】

『いい映画にはいい雰囲気がある』
上原 徹　アートダイジェスト
N 778.2

『映画を観ながらあれこれ思う』
西村 玲子　文化出版局
N 778.0

『映画を見ればわかること』
川本 三郎　キネマ旬報社
N 778.0

『映画館と観客の文化史』
加藤 幹郎　中央公論新社
I 778.0



『映画が教えてくれた大切なこと』
淀川 長治　TBS ブリタニカ
778.0

『映画が目にしみる』
小林 信彦　文芸春秋
N 778.0

『映画狂人日記』
蓮実 重彦　河出書房新社
778.0

『映画超特急』
中野 翠　マガジンハウス
778

『映画的郷愁』
武田 秀夫　パロル舎
N 778.0

『映画と共に歩んだわが半生記』
淀川 長治　近代映画社
N 778.0

『映画の玉手箱　私的戦後映画史』
進藤 七生　朝日ソノラマ
778.0

『映画放浪記　大人の映画館』
色川 武大　キネマ旬報社
N 778.0

『映画は光と影のタイムトラベル』
加納 一朗　パピルスあい
N 778.2

『老いてこそわかる映画がある』
吉村 英夫　大月書店
N 778.2

『おすぎとピーコの
　この映画を見なきゃダメ！』
おすぎ　学研　N 778.0

『外国映画
　ぼくのベストテン 50 年』
双葉 十三郎　近代映画社　N 778.2